

基肄城築造1350年

基肄城を知る

14

— みんなで手入れた山、基山 —



基山町では、大正天皇即位を記念して、基肄城跡内に「記念学校林」を設け、以後幾太郎氏の援助により後世に受け継がれることとなります。

次の世代に受け継ぐ「基肄城跡」

んどが町有地となっています。郷土の先人達の努力により守り継がれてきた大切な基肄城跡を、後世の人々に引き継ぐことこそが現代に生きる我々の責務ではないでしょうか。

※注 つばな（茅花）

方言＝つばな。草原に生えており、かつては穂が出る前に食べられていた。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200

基山山頂駐車場から頂上を指して50mくらい登ると、右手前方の木々に囲まれた所に、石柱の記念碑が建てられています。その記念碑には「日本植林発祥の地」と刻まれていて、「緑化の父」と呼ばれた徳川宗敬書とあります。

そばの案内板によると、



「日本植林発祥の地」記念碑

『ここ基山から東に続く丘陵地は筑紫の名の発祥地で、わが国最初の植林地と伝えられる。日本書紀に次のようにみえる。『初め五十猛神天降ります時に、多に樹種を将ちて下る。然れども韓国に殖えずして、盡に持ち帰る。遂に筑紫より始めて凡て大八洲国の内に、播殖して、青山に成さすということ莫し』とあり、江戸時代の学者貝原益軒・明治時代の文学者久米邦武博士によつて、「筑紫」とはここ「きのやま」（基山）と断定され、日本で最初に植林が行われた地といわれています。

植林の山（梁井幾太郎氏）

全国的に植林事業が奨励されるようになったのは、明治30年

代からです。

佐賀県内では、明治37年度から大正10年度までに合計600町歩の植林が実施されたと記録にあります。

基山町での植林事業には、梁井幾太郎氏が大きな役割を果たしています。

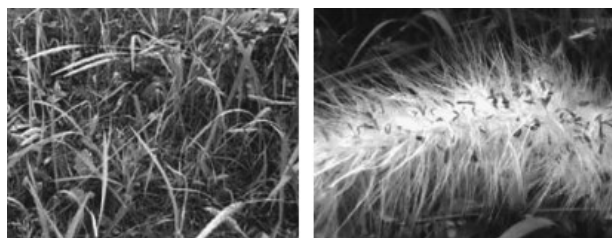
幾太郎氏は、佐賀県での林業講習会へ参加したり、先進地（和歌山県・奈良県）視察に派遣されるなど、明治42年頃から山林の植林事業に力を注がれました。また、植林地で硫酸（硫酸アンモニウム）を施肥として使用する方法を世界で初めて実践するなど研究熱心でもありました。後に佐賀県の林業発展のために尽力し、産業功労者として表彰もされています。

『きの山のつばな ※注 穂に出て風ふけば風のままに打ちなびくなり』

一刀研二

現在の基山一帯は、大部分が戦後に植えられた杉やヒノキなどの人工植林に覆われています。基山山頂南西側斜面には、町によつて桜が植栽されており、その西側には、サザンカやつつじが植えられていて、春や秋には美しい花々を見ることが出来ます。また、貴重な植物である「翁草」などの生育地としても知られています。

基肄城跡の土地所有者状況は、平成3年の町有地面積はわずかに7・2%でしたが、現在はほと



つばな（茅花）